

公益財団法人 檜の芽会 御中

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】		①作成日	令和 8 年 3 月 14 日
②法人・団体名	一般社団法人ウネシャル		
③団体所在地 (都道府県・市町村名まで)	三重県四日市市		
④責任者氏名	福本 由紀	(役職名等)	代表理事
⑤担当者氏名	小西 凌	(役職名等)	理事

【奨学活動の概要】

⑥助成交付決定番号	R07-019	⑦助成金額	50 万円	⑧申請カテゴリー	C
⑨奨学活動名	学習支援×キャリア教育：未来を拓く学びの場				
⑩主な実施場所名・及びその住所	おにぎりの桃太郎エスカーラ店 (〒510-0075 三重県四日市市安島 1 丁目 1 - 6 0)				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式 3 - 2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

本事業では、経済的・環境的な困難を抱える高校生を主な対象として、学習支援を中心とした伴走型支援を実施した。定期テスト期間前後を中心に年間を通じて学習支援を行い、大学生支援員による少人数制の個別・半個別指導を実施した。延べ 458 名の高校生が参加し、学校の授業内容や試験範囲に即した支援を通じて、学習への不安の軽減や学習習慣の定着につながった。

地元企業と連携し、店舗の閉店後の時間帯を学習支援の場として活用した。落ち着いた環境で学習に取り組める「第三の居場所」を確保することで、高校生が安心して継続的に参加できる体制を整えた。地域の既存資源を活用することで、施設費用を抑えながら安定的な学習支援を実施できたことも成果である。

また、学習支援を継続する中で、進路や将来に関する悩みを抱える高校生が多いことが明らかとなり、こうしたニーズを踏まえてキャリア教育を実施した。弁護士による職業体験では、裁判傍聴や模擬体験を通じて職業理解を深め、学びと将来を結びつけて考えるきっかけとなった。本事業は、学習支援を基盤に地域資源を生かした実践として、高校生の学習意欲と将来意識の向上に寄与した。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式 3 - 2 等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A：人)	平均時間 (B：時間)	活動量 (A × B)	備考・補足・計算根拠等
中学生等	5	4	20	1 回 5 人 × 10 日
高校生等	458	4	1832	1 回約 12 人 × 44 日、イベント 1 回 7 人 × 1 日
大学生等	88	4	352	1 回 2 人 × 44 日
学習支援員等	88	4	352	1 回 2 人 × 44 日
その他	2	4	8	1 回講師 2 人
合 計			2212	

⑬その他の定量的な数値（任意）

公式ライン登録者数（R7.6～）331 人。参加者学年 1 年生 248 人、2 年生 43 人、3 年生 167 人、参加学校 31 校

メディア掲載 4 社（中日新聞、朝日新聞、伊勢新聞、CTY）

令和 7 年度伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：学習支援×キャリア教育：未来を拓く学びの場

法人・団体名：一般社団法人ウネシャル

作成者 氏名：福本 由紀

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

本活動では、高校生が、十分な学習機会や安心して学べる環境を得にくいという課題に取り組んだ。とりわけ、家庭や学校以外に落ち着いて学習できる「居場所」が不足していること、また学習の先にある進路や将来像を描けず、学習意欲が低下しやすいことが大きな課題であった。

こうした状況を踏まえ、本活動では学習支援を中心とした伴走型支援を実施し、学力面の支援とともに、学びを将来につなげる視点を育むことを目的とした。定期テスト期間前後を中心に、大学生支援員による少人数制の個別・半個別指導を行い、生徒一人ひとりの理解度や状況に応じた支援を心がけた。

2. 実施した奨学活動の詳細

(1) 活動全体の概要

本活動では、経済的・環境的な困難を背景に学習や進路選択に不安を抱える高校生を主な対象とし、学習支援を基盤にキャリア教育を組み合わせた伴走型支援を実施した。単なる学力向上にとどまらず、学びを将来につなげる視点を育むことを目的に、日常的な学習支援と体験型のキャリア教育を連動させた取り組みを行った。

学習支援は、各学期の定期テスト期間の前後を中心に実施し、年間を通じて延べ約 50 日間開催した。大学生の学習支援員 2 名が担当し、学校の授業内容や試験範囲に応じた個別対応を基本とすることで、高校生が安心して学習に取り組める環境を整えた。

また、学習支援の過程で顕在化した進路や将来への不安に対応するため、長期休暇期間を中心にキャリア教育を実施した。地元企業や専門職の協力を得て、職業人との対話や職場体験の機会を設けることで、高校生が社会との接点を持ち、進学や就職を含めた将来像を具体的に考えるきっかけを提供した。



活動は、当団体の会員企業の施設を活用し、少人数制の環境のもとで実施した。

（２）参加人数

学習支援には、延べ 458 名の高校生の利用があった。学習支援員として大学生が延べ 106 名参加し、少人数制による継続的な支援体制を確保した。

（３）学習支援の実施内容

学習支援は定期テスト期間前後を中心に年間を通じて実施し、大学生支援員による個別・半個別指導を行った。学校の授業内容や試験範囲に即した学習支援に加え、学習計画の立て方や復習方法の助言を行い、学習への不安軽減と学習習慣の定着を図った。

（４）キャリア教育の実施

学習支援を継続する中で、進路や将来に関する悩みを抱える高校生が多いことが明らかとなり、これを重要なニーズとして捉え、キャリア教育を実施した。

具体的には、弁護士による職業体験型プログラムを行い、裁判の傍聴や、事件を題材とした台本の読み合わせを通じて、法律の役割や専門職の仕事について学ぶ機会を提供した。専門家との直接的な対話や体験を通じて、職業に対する理解が深まり、学びと将来を結びつけて考えるきっかけとなった。



（５）地域やボランティア活動との連携

本活動では、地元企業と連携し、店舗の閉店後の時間帯を学習支援・キャリア教育の場として活用した。静かで落ち着いた環境を確保することで、家庭や学校とは異なる「第三の居場所」として機能し、継続的な参加を可能にした。また、大学生が学習支援員として関わり、地域全体で子どもを支える体制づくりにつながった。

（６）周知方法および協力いただいた関係者

参加者募集は、当団体の公式 HP および SNS、公式 LINE を通じた情報発信に加え、学校、自治体、教育・福祉関係者からの紹介を通じて行った。令和 7 年 6 月から運用を開始した公式 LINE 登録者数は 331 人に達し、幅広い層への情報周知が図られた。

参加者は延べ 31 校に在籍する生徒で、学年別では 1 年生 248 人、2 年生 43 人、3 年生 167 人となり、複数学年にもわたる参加が見られた。

また、地元企業や専門職の協力を得ることで、学習支援にとどまらず、キャリア教育の機会を提供することができた。加えて、本活動は中日新聞、朝日新聞、伊勢新聞、毎日新聞、CTY、地域メディアなど計 6 社のメディアに取り上げられ、地域社会における認知向上と理解促進にもつながった。

(7) 購入した機材・物品

本活動の実施にあたり、学習支援および参加者募集・運営に必要な物品を購入した。具体的には、学習支援の場で使用する筆記用具、ノート、コピー用紙等の事務用品・文房具類に加え、活動内容や参加方法を周知するための募集チラシ・ポスター等の印刷物を作成した。

これらの物品は、学習支援員が生徒一人ひとりに対応する際の円滑な学習環境の確保や、事業への参加を促すための広報活動に活用したものであり、いずれも本事業の目的達成に必要不可欠なものである。なお、高額な備品や施設器具の購入は行っておらず、必要最低限の消耗品・印刷物に限定して支出した。

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

本活動を通じて、学習支援を基盤とした伴走型の関わりが、生徒の学習への不安軽減や学習習慣の形成に有効であることが確認された。特に、定期的に顔を合わせる支援員の存在や、落ち着いて学習できる学校外の居場所が、生徒の心理的安心感を支え、継続的な学習参加につながっていることが明らかとなった。また、学習支援の中で進路や将来に対する不安が顕在化する場面も多く見られ、キャリア教育を組み合わせることで、学習と将来を結び付けて捉える視点が育まれ、学習意欲の向上につながることが確認された。

一方で、限られた時間や人員体制の中では、すべての生徒の学習状況や個別ニーズに十分対応しきれない場面もあった。支援員ごとの関わり方や対応に差が生じる可能性も課題として認識されており、今後は支援員間での情報共有の仕組みづくりや、学習支援・キャリア支援に関する研修の充実を通じて、支援の質をさらに高めていく必要がある。

今後は、既存の学習支援事業を安定的に継続しつつ、商店街拠点を活用した自習室事業の運営を段階的に発展させ、定期テスト時期に限らない継続的な学習機会の提供を目指す。また、地元企業や専門職、地域団体との連携を広げることで、学習支援とキャリア教育をより体系的に組み合わせた取り組みへと発展させていきたい。あわせて、活動の実践内容や工夫、生徒や支援員の声を継続的に発信することで、地域や関係機関に本事業の意義を伝え、将来的には他地域や他団体にも共有可能な学習支援モデルとして整理・展開していくことを展望している。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

参加した高校生からは、「家では集中できなかったが、ここでは落ち着いて勉強できた」「大学生の先生に相談できて安心した」といった声が寄せられた。学習環境や身近なロールモデルの存在が、生徒にとって心理的な安心感や学習への前向きな姿勢につながっていることがうかがえた。

また、キャリア教育に参加した生徒からは、「勉強と将来がつながって考えられるようになった」という感想も聞かれ、学習支援を単なる学力補充にとどめず、進路や将来像と結びつけて行うことの重要性をあらためて実感する機会となった。さらに、「来年度もぜひ続けてほしい」「継続して参加したい」といった声もあり、本活動が生徒にとって継続的な学びの場として期待されていることがうかがえた。

5. 学識者からのご意見、コメント、等（申請カテゴリにて「S」が付されている団体）

なし